

長野県南安曇郡安曇村 及び奈川村の地理学的考察

田多井 賢 子

出稼ぎ現象にもなり農山村の産業構造の変化、という事に興味を持ち、長野県南安曇郡安曇村、及び奈川村における近世以降の産業変遷について、自然条件、社会条件との有機的結びつきを体系的にとらえようと試みた。

第1章では、自然条件の概説を述べた。

安曇村、奈川村は、北アルプス南東部に位置し、四周の高峻な山から流れ出る梓川、及び奈川の作った河岸段丘上と、乗鞍火山の溶岩流が作った同火山の下部斜面以外には、たいした耕地はない。森林率が9割以上をしめる山村である。気候は1,300m前後の海拔高度に影響されて、冬季は厳寒であるが、夏季には水稻作が行なえる。しかし地形的な霜道のため、しばしば霜害がみられる。

第2・3・4章では、産業構造の変遷を近世、明治から第二次大戦後の出稼ぎのはじまる昭和5年頃まで、最後に出稼ぎ期という具合に区切ってみた。この3章がこの論文のポイントであるが、はなはだ主観的類推箇所が多い。

安曇村は徳川時代には松本藩の御用出稼ぎの村であり、奈川村は尾州藩に属していて、尾州の崗船といわれた程の出稼ぎを中心とする村であった。近世後期には曲経済、はたご経営等によって、ある程度財力を持つものができ、階級分化が進む。明治になり藩経済から解放されると、当時全国的に爆発的景気を持っていた養蚕業が、両村で非常に盛んになる。特に安曇村谷口諸集落の蚕種業には特筆すべきものがある。第二次大戦の戦時下には供出用燃料として製薪・製炭業が盛んだった。養蚕・林業だけでなく、農耕用地への進出もみられる。

安曇村の農業地域である番所集落は、明治中葉から大野川集落の出作り地だったのであるが、昭和15・16年頃には定着し、終戦直後、沢渡等の集落も定着した。

そば等を中心にした雑穀農業から、一毛作田の普及、酪農の発達等がみられるが、島々等の谷口集落から1時間を要する事と、道路が不完備である事等が、奥地の農業集落の発展をさまたげている。一方、島々等の谷口集落は戦後松本・渡多方面への通勤地として発展したと考えられる。現在は、ダム建設工事へ日雇人夫としてやとわれている者が多い。奈川村は安曇村の奥地にあり、安曇村谷口集落のように通勤地として発展した集落ではない。そのかわり農耕地の開拓が著しい。明治から昭和初期の養蚕業の発展と、昭和30年頃には大規模な開田工事が行なわれた。現在は一毛作田・養蚕・酪農が中心の村であるが、ここでも交通の発達が必要である。